

エ 掛川市

(7) 掛川市立横須賀小学校

1 2年間の取組の状況

年間計画に従い、調査研究実施報告【資料1参照】の通り、授業づくり・学級づくり研究に取り組んだ。

(1) 授業づくりからのアプローチ

研究テーマを「課題を自分ごととして捉え、子供たち自身で課題解決ができる子」とし、算数科を窓口とした研修を行った。また、講師として静岡大学の村山功教授を招聘し、授業づくりや授業改善についての研修を行い、工作的発問やARCSモデルの視点等について御教授いただいた。学力調査や定着度調査の分析の仕方や考え方についても、御指導いただいた。

ア 単元構想の工夫

2年間の研究の中で、単元を貫く軸を設定し、単元の導入で児童と共有することを徹底した。また、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、資質・能力を育成するため、単元の中で習熟度別の少人数学習を取り入れたり、ICTを活用して他者の学びの姿を共有する場面を設定したりすることで、自ら学びを進めていけるようにした。また、それらの様子を見取り、個に応じた指導をした。

さらに、個別の学びの場や意図的な3人組の学習班を設定する等、学習形態を工夫することで、課題解決のための「必要感のある対話」や「児童の考えを広げたり深めたりするための対話」とすることができた。その上

で、課題解決に向けて、児童の必要感に合わせ、学習形態を自分で選択できることにも挑戦した。【写真1】



イ 学習課題・学習問題の工夫

目的やねらいを達成するために、児童にとって必要感のある学習課題や学習問題を設定した。

研究指定1年目の令和5年度は、学習課題を「今日やること・考えること」がどの子にも分かる内容とした。「子供たちが学びたいと思うことは何か」と授業者が考え、「子供たちの経験したことと関連付ける」、「『あれ? どうして?』と思う現象について扱う」など、子供にとって自分ごとになるような課題や問題になるよう心掛けた。

研究指定2年目の令和6年度は、学習課題や問題を設定する際、児童の経験に関連付けるだけでなく、児童のつまずきを反映させることも大切にした。また、児童が既習の学習を生かし、見通しをもって取り組むことができる課題を児童と共に設定した。1年目に引き続き、授業において、ICTを効果的に活用し、写真や動画、図を用いて視覚的に提示したり、実物などの具体物を提示したりして、実感を伴って理解できるようにしたことで、全ての児童が、学習課題を理解し、課題解決に向けて主体的に取り組むことにつながった。【写真2】



ウ 生徒指導が機能する授業づくりシート

2年目の令和6年度は、授業づくりの土台となる支持的風土を作るために、全教員が「生徒指導が機能する授業づくりシート」【資料2参照】を活用し、授業における重点項目を設定した。また、授業参観の視点として、授業者と参観者で共有した。事後研修では、発達支持的生徒指導の観点も考慮して、手立てが効果的であったかという視点で授業を振り返った。

エ 確かな学力につなげる「まとめ・振り返り」

令和5年度から、授業や単元を通して「どんなことを学んだのか」「実生活のどのような場面で生かせそうか」を表現することを重視した。授業で学んだことを、自分の言葉でまとめることで、一人一人が学習の足跡を残し、自らが得た力として、以降の学習に生かすことができることを目指した。また、振り返りでは、授業での学びを実生活に生かす場面を考えたり、今後の学習の見通しを立てたりすることで「社会生活で生きる力」として身に付けることを目指した。

「まとめ」を書く時に、全ての児童が本時の学んだ内容を確認できるように、板書やノートに書く学習課題は赤枠で囲むように全校で統一した。児童が既習事項を振り返る際にも、学びの履歴が確認しやすいようにした。

令和6年度は、令和5年度からの取組に加え、児童が振り返る視点を選択できるように「よこすか型学びのふりかえりシート」【資料3参照】を活用し、児童の発達段階に応じ、単元を見通して振り返りを計画的に行った。単元のどの場面で振り返るかについて、単元構想を立てる段階から研修を重ね、「自分の学び方を自分で振り返り」ことができるようにした。そして、その振り返りが「自分の学び方を自分で決める」ことにつながるようにした。

(2) 学級づくり（学校づくり）からのアプローチ

「自分への信頼を高める『自分を伸ばすのは自分』人を大切にして聴く『聴いたことを受け止める』」を生徒指導の柱とし、学級づくり・学校づくりに取り組んだ。



また、講師として、鳴門教育大学の久我直人教授を年2回招聘し、令和5年度は、全学級の授業と1クラス中心授業を公開、令和6年度は全学級の授業の公開と5年生対象の学校づくりの師範授業を実施していただき、事後研修を行った。

久我教授からは、職員の人権感覚を磨き、児童の自己肯定感を高めるボイスシャワー等について、また、来年度リーダーとなる5年生がどうすればよりよい学校となるかを自分ごととして考えられるよう、御教授いただいた。教育課程編成会議にも加わっていただき、御助言いただいた。【写真3】

ア 教師と児童・児童同士の望ましい関係を育む

(ア) キラリカード（自他のよいところを見つけて言葉で表現する）取組

学校教育目標「自分もみんなも大切にする子」と人権教育を基盤に、安心して学校生活を送り、自分の意見が表現できるよう、心づくり部を中心として、自分のよさや友達のよさを見つけ伝える「キラリカード」の取組をした。テーマを月ごとに設け、全児童が自分や友達のよさを振り返る時間を週1回確保した。来校した保護者や地域の方にも参加していただき、キラリカードに書かれた内容を昼の放送で全校に紹介したり、教室だけでなく昇降口前廊下や中央廊下に掲示して「キラリの塔」としてカードを積み上げたりすることで、可視化し自己肯定感を高めることにつなげた。保護者や地域も巻き込んで、自分が大切にされているという実感をもつことができるようにした。【写真4】

また、児童の人権感覚を磨くため、教師が手本となり丁寧な言葉遣いを心掛けた。



【写真4】

(イ) 発達支持的生徒指導の推進

温かな雰囲気のある学校を目指し、全職員で発達支持的生徒指導を意識した。口頃から、児童の名前を付けて挨拶したり、児童一人一人の話をしっかり受け止めて対話したりして、児童が全職員から温かみや思いやりを実感できるよう心掛けた。明るい挨拶や温かな言葉遣い（ほかほか言葉）の浸透を図ることで、児童同士がお互いを大切に、尊重し合うことができる土壌を作ることができた。

イ 児童が主体的に活動する学校行事

(ア) 教育課程（日課）の見直しと工夫

昼休みの他に、業間「さわやかタイム」を設け、この時間には委員会活動や当番活動等を行わず、担任も含め学級全員で遊ぶ時間とした。自分たちで遊びやルールを考えるを通して、自己表現力や判断力、折り合いを付ける力を伸ばすことができた。

(イ) 異学年交流・園小中の交流の実施

月ごとにペア学年を定め、交流を行った。

朝活動、業間や昼休み、行事等を活用し、下学年への読み聞かせ【写真5】、レクリエーション【写真6】、運動会種目での協力等を行った。また、1年生が年長児を招いて、おもちゃランドやお店屋さんを開いたり、2年生が音読劇を見てもらうため園に出掛けたりした。



【写真5】



【写真6】

大須賀中学校2年生の職業体験時に「中学校で必要となる力、大切にしたいこと」等について、6年生に向けてミニ講話をしてもらう機会を設けた。このような活動により、9年間を通じて、児童生徒同士の望ましい関係づくりの土台を築くことができた。【写真7】



【写真7】

2 2年間の成果のまとめ

(1) 授業づくりからのアプローチの成果

2年間の研究を通して、大須賀中学校区3校において、人権教育を基盤に、一人一人の児童生徒を大切にした教育活動を推進し、同じ視点に立った授業改善・授業づくりに取り組んだことで、義務教育9年間で育成すべき資質・能力を共有することができた。

ア 単元構想の工夫

「単元構想」において、主体的・対話的で深い学びを通して資質・能力を育成するために、単元を貫く軸を設定し、各授業で問い続けてきたことは、児童が学びの必要感や見通しをもち、自分ごととして学ぶ姿につながったと考える。このことは、全国学力・学習状況調査における生活習慣や学習環境等に関する質問調査（以下：質問調査）「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいましたか」が83.0%から90.8%に向上したことからも言える。

課題や問題が出たとき、「今の自分はどうか考えたか」を大切にし、この段階でのつまづきを子供自身が理解することで、課題解決にたどり着くために「どんな方法で学べばよいか」「誰に質問をすればよいか」を考えることができるようになった。

また、全学級で、授業における学習班を3人とし、単元の中で意図的に協働的な学びの時間を設定したことで、一人一人が意見を述べ、互いの考えの共通点や相違点を捉えながら、子供たち自身の力で課題解決しようという意識が高まった。自分の考えを周りに広げるだけでなく、自分の考えを再認識し、深めることもできた。

イ 学習課題・学習問題の工夫

「学習課題・学習問題」を設定する際、興味を喚起する課題や問題を設定することで、解決困難なことに対しても諦めず、「解決したい」「できるようにになりたい」という気持ちをもつことができた。また、課題や問題を「自分ごと」として捉えることで、1時間で何を学ぶかや、単元を通して何を学ぶかを理解できるようになった。

また、工作的発問やARCSモデルの視点を参考にしたことで、児童生徒が自ら学びを進めたり共に学んだりする姿が多く見られるようになった。これは、教師がファシリテーターとして、対話の状況を見取り、思考を活性化するための発問を適切なタイミングで行ったことの積み重ねであると考えられる。自己決定ができる学習環境を教師が整えることは、児童生徒が学びを調整し、自らの課題を解決する姿につながった。

ウ 生徒指導が機能する授業づくりシート

シートの視点を参考に個の考えを大切にしたり、互いの考えを認めたりする授業づくりを行ったことで、児童が安心して学ぶ環境づくりをすることができた。これまで、自分の考えに自信をもてず表現できなかった児童も、「分からない」「自分はこう思うんだけど」と自分の理解度を客観的に捉えて表現することができた。

授業案に生徒指導の視点として明記したことで、授業の事後研修では、誰一人取り残さない教育へ向けて本時の手立てが適切であったか協議することができ、学校全体の授業や学級づくりの改善へとつながった。

エ 確かな学力につなげる「まとめ・振り返り」

学習問題に対する答えを自分の言葉でまとめることで、児童が1時間の学習で身に

付けたい力へ迫ることができるようになった。

振り返りでは、視点を与えたことで、自己の学び方を客観的に捉えたり、新たな疑問をもったりすることができた。振り返りを生かして、自分に合ったよりよい学び方を考えたり、次時につながる予想を立てたりすることができるようになった。さらに、「買い物をするときに生かせそうだ」「この方法ならこんな問題でも解ける」と生活や他教科と学びをつなげている姿が見られるようになった。学びをアウトプットする機会が増えたことで、学習の定着へつながっている。

【横須賀小】

授業がわかる	R 6 評価 肯定割合	児童 93% (強肯定 52%) 保護者 87.4% 職員 100%
	R 5 年度との比較	±0 10%↑ 0.4%↑ 7%↑
	R 5 評価 肯定割合	児童 93% (強肯定 42%) 保護者 87% 職員 93%
	R 4 年度との比較	4%↑ 7%↑ 23%↑
自分から考え や思いをみんなの前で話す	R 6 評価 肯定割合	児童 86% 職員 73.3%
	R 5 年度との比較	6%↑ 13.7%↓
	R 5 評価 肯定割合	児童 80% 職員 87%
	R 4 年度との比較	11%↑ 22%↑
自分と相手を 比べながら 聴く	R 6 評価 肯定割合	児童 90% 職員 73.7%
	R 5 年度との比較	1%↑ 13.7%↓
	R 5 評価 肯定割合	児童 89% 職員 87%
	R 4 年度との比較	※R 4 年度は質問内容が違うため、比較なし

令和 5 年度 4 月に実施した全国学力学習状況調査では、無解答が多く、算数科において、全国平均との差-7.2 ポイント、県平均との差-7 ポイントであったが、令和 6 年度は、対象児童や学力調査の問題は異なるものの、無解答がほとんどなく、全国平均との差-0.4 ポイント、県平均との差は+0.4 ポイントという結果になった。令和 6 年度 6 年生は、4 年時までの定着度調査の算数科において、平均との差が-10 ポイントほどという実態であったが、5 年時（指定研究 1 年目）の定着度調査では、県平均との差は-6.5 ポイントとなり、6 年時（指定研究 2 年目）は、さらに算数の上位層が増え、下位層が減った。県平均との差は+5.8 ポイントであった。国語にも伸びが見られた。

令和 5 年度から、本研究指定を受けたことを契機とし、特に研修窓口教科である算数科においては、教師が授業観を変え、自分ごととして学ぶ児童が増えた。一人学びや 3 人組の話合い等を通して、じっくり考える、主体的に聞く、考えを共有したり比べたりすることなどで表現力を伸ばし、意欲を高め、粘り強く学習に取り組むことができるようになった。全国学力・学習状況調査における教科に関する調査（算数）無解答の減少は、これらの成果の一つであると考えられる。

R 5 無回答率比較

	1(1)	1(2)	1(3)	1(4)	2(1)	2(2)	2(3)	2(4)	3(1)	3(2)	3(3)	3(4)	4(1)	4(2)	4(3)	4(4)	平均
横小	0.0	1.9	7.5	3.8	1.9	7.5	5.7	9.4	1.9	3.8	3.8	7.5	7.5	7.5	22.6	9.4	6.4
県	0.9	1.1	3.1	1.1	0.9	3.4	4.7	5.2	1.6	4.5	2.6	4.4	3.0	4.7	14.6	5.7	3.8
全国	0.8	1.0	3.4	1.2	0.7	2.9	3.7	4.0	1.4	4.0	2.5	3.9	2.4	4.3	13.8	4.9	3.4

R 6 無回答率比較

	1(1)	1(2)	1(3)	1(4)	2(1)	2(2)	2(3)	2(4)	3(1)	3(2)	3(3)	3(4)	4(1)	4(2)	4(3)	4(4)	平均
横小	0.0	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	9.4	0.0	0.0	0.0	3.1	1.6	0.0	0.0	4.7	0.0	1.4
県	0.3	0.4	3.8	1.8	1.0	1.1	11.1	2.5	3.6	4.3	3.4	5.7	2.4	5.0	13.9	5.8	4.1
全国	0.2	0.3	3.4	1.3	0.6	0.8	9.8	1.8	3.1	3.3	2.4	4.6	1.8	3.9	12.6	4.0	3.4

(2) 学級づくり（学校づくり）からのアプローチの成果

発達の段階を意識したコミュニケーション活動や日常的なプラスの「ボイスシャワー」を行ったことで、自他を受容したり自己肯定感を高めたりすることができた。「教師から児童へ」だけでなく、「児童同士へ」も取組を広げたことで、温かな雰囲気の中で、安心して学び合えたり、自信をもって物事に進んで取り組んだりできる学級集団となってきた。その結果、質問調査「自分にはよいところがある」が87.9%から89.8%に向上した。

特に、久我教授の学級・学校づくり研修における御指導から、今後に生かせそうなことを職員が自分ごととして考え、できることから実践できた。ボイスシャワーの具体例を御示唆いただいたことにより、子供のよさを教師（大人）が見つめ、直接褒めるだけでなく間接的に褒めることの効果や、教師（大人）にとって都合のよいところを褒めても子供には響かないことなどを学ぶことができた。

ア 教師と児童・児童同士の望ましい関係を育む

キラリ見つけを継続することで、互いのよさを見つけることや「ありがとう」を発する場面が増えた。また、保護者や地域からも認めていただけることは、子供の自信につながり、感謝の気持ちを育むことができた。

イ 児童が主体的に活動する学校行事

ペア活動や学校行事等において、児童が思い描くよりよい学校生活の実現のために、話し合いの場を意図的に設定し、自分たちの手で、計画・立案・実践できるようにした。試行錯誤しながら、自分たちの思い描く最適解を創り上げる体験は、児童生徒が達成感や成就感を味わうこととなり、令和6年度学校評価アンケート「学校が楽しい」の強肯定割合が、昨年度と比べ10%向上したことにつながった。本中学校区の不登校児童数が2.2%弱に減少したことも、「授業づくり」「学級づくり」を一体的に展開させ、研究を進めてきたことの成果であると言える。

【横須賀小】

学校が楽しい	R 6 評価 肯定割合	児童 91% (強肯定 52%) 保護者 95.8%
	R 5 年度との比較	2% ↓ 10% ↑ 0.2% ↓
	R 5 評価 肯定割合	児童 93% (強肯定 42%) 保護者 96%
	R 4 年度との比較	4% ↑ 5% ↑
キラリ見つけ（自分や友達のよさを見つける）に取り組んでいる	R 6 評価 肯定割合	児童 89% (強肯定 53%) 保護者 98.5%
	R 5 年度との比較	±0 7% ↓ 0.5% ↓
	R 5 評価 肯定割合	児童 89% (強肯定 60%) 保護者 99%
	R 4 年度との比較	11% ↑ ※前年度 質問なし
よりよい学級、学校にするための活動に自分から取り組むことができている	R 6 評価 肯定割合	児童 91% (強肯定 44%) 職員 89.5%
	R 5 年度との比較	4% ↑ 5% ↑ 0.5% ↓
	R 5 評価 肯定割合	児童 87% (強肯定 39%) 職員 99%
	R 4 年度との比較	※前年度、データなし

【資料Ⅰ】 調査研究実施報告

日付	研修内容	授業者
4 / 10(水)	研修推進委員会① 今年度の研修(方向性・授業案形式等)について	
/ 15(月)	I C T研修① I C T活用について	
/ 17(水)	研修① 今年度の研修(方向性・授業案形式等)について	
/ 22(月)	研修② 学調の分析、考察 算数科の授業について	
5 / 1(月)	研修推進委員会② 事前研修・事後研修について	
/ 15(水)	研修推進委員会③ 支援研修(提案授業)事前研	
/ 22(水)	研修③ 提案授業(提案授業)事前研	
6 / 3(月)	研修④学級づくり研修(鳴門教育大 久我先生)講話	
/ 5(水)	☆研修⑤支援研修:静西(提案授業) 提案授業 事後研	宇佐美
/ 12(水)	若つつじ学園第1回小中合同研修会(大須賀中) 研修⑥	
/ 19(水)	研修推進委員会④ 第2回合同研修会事前前研	
7 / 3(水)	☆研修⑦ 支援研修 第2回合同研修会事前研	
/ 30(火)	研修推進委員会③ 若つつじ学園第2回合同研修会事前研	
/ 31(水)	夏季研修① 学力向上サポートチーム訪問 村山教授講話	
8 / 1(木)	夏季研修② カウンセラーによる児童理解研修	
/ 2(金)	夏季研修③④ I C T 特別支援 人権 道徳等伝達研修	
/ 9(金)	第2回合同研修会 授業者報告メ切	
/ 28(水)	研修⑧ 夏休みまでの振り返り ※授業案:第1次案提出	
9 / 4(水)	研修推進委員会④ G I G A授業づくり支援訪問事前研	
/ 11(水)	☆G I G A授業づくり支援訪問 研修⑨	川又・鈴木・廣住
10 / 2(水)	研修⑩ 若つつじ学園第2回合同研修会事前研(確認)	
/ 21(月)	※授業案:提出(市教委)メ切	
/ 25(水)	研修⑪ 今後の研修の成果と課題 第2回合同研準備	
11 / 22(金)	☆若つつじ学園第2回合同研修会 研修⑫	横山・川又 鈴木・宇佐美 土井・立岩
/ 27(水)	研修⑬ 学級づくり研修事前研	
12 / 19(木)	研修推進委員会⑤ 成果の把握等について 次年度へ向けて	
1 / 27(月)	☆学級づくり研修(鳴門教育大 久我先生) 研修⑭ 事後研	岩堀・土井
2 / 5(水)	研修⑮ 次年度へ向けて	

【資料2】

横須賀小版 「生徒指導が機能する授業」

機能	ねらい こんな授業を	授業や生活での効果	手立て
自己存在感	自分を価値ある存在であると思える。 一人一人に学びの実感や達成感を味わせることができる授業	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に自信をもち、積極的に取り組もうとする。 ・自分を価値ある存在だと思えるようになり、他の人も認めようとするようになる。 ・主体的に学習することができるようになる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①「がんばっているね」等のほめる励ます認める言葉を遣う。 ②一人学びを設定する。 ③全員が考えをもてるような課題を工夫する。 ④つぶやきを取り上げる。 ⑤発言が少ない児童への心配りをする。 ⑥だれもが困っていることや疑問を言える雰囲気をつくる。 ⑦一人一人のよさを認め合う場を設ける。
共感的な人間関係	互いに人として尊重し合う心をもつ。 相手のことを考えて、主体的に聴く。 誰とでも互いに認め合い、学び合うことができる授業	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を認められる安心感から、のびのびと自分らしさを発揮し、人を受け入れることができるようになる。 ・間違いを恐れずに発表できるため、前向きに取り組める。 ・集団の中に居場所ができ、安心して生活を楽しめる。 ・相手を敬う気持ちが育つ。 ・安心して対話的な学びができるようになる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①本気で聴いたり反応したりする指導をする。 ②安心して発言できる雰囲気をつくる。 ③相手を傷つけるちくちく言葉は使わないよう呼び掛ける。 ④お互いの考えの違いに気付かせるための話し合いの時間を設定する。 ⑤自分と違う意見も受け入れる。 ⑥うまく発表できない子や小さな声の子も温かく支えるよう声掛けをする。 ⑦集団での学び合いが充実するよう自分の出番を考えさせる。
自己決定	自分で決めて実行する。 自分で課題を見つけたり課題に向かって取り組んだりし、自ら考え判断し表現することができる授業	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で決めて実行できる楽しさを感じ、活力が生まれる。 ・自分の考えをもって話し合いや活動に参加するため、他の考えと比べたり自分の考えを深めたりすることができるようになる。 ・主体的に学習することができるようになる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①自分で考えさせて決める場を設定する。 ②判断に困っている場合は、選択肢を与えたり、教師の考えを示したりする。 ③自分で決めたことは責任を持たせる。 ④考える時間を十分確保する。 ⑤思考過程が分かるノートができるようにする。 ⑥思考過程の分かる板書を工夫する。 ⑦自分の考えを伝える場を設定する。

【資料3】

よこすか型学びのふりかえり

年 組 名前 ()

ばんごう 番号	かんてん 観点	ないよう 内容
1	<p>なるほど</p> 	<p>～が分かった。～が分からなかった。</p> <p>前に習った～を使ったら～できた。</p> <p>(算数の見方・考え方について)</p>
2	<p>なっとく</p> 	<p>〇〇さんの考えを聞いて、自分は～と思った。</p> <p>〇〇さんの考えのよいところは～。</p>
3	<p>はてな</p> 	<p>～がどうなるのか気になった。</p> <p>他の場面でも今回の～は使えるのかな。</p>
4	<p>やってみたい</p> 	<p>～をもっと調べてみたい。</p> <p>次は～をやってみたい。</p>
5	<p>いかしたい</p> 	<p>ふだんの生活や学校のこんな場面でも使っている。</p> <p>他の教科では、～の学習で使えると思う。</p>

1 2年間の取組の状況

(1) 授業づくりからのアプローチ

若つつじ学園共通の指定研究テーマ「『誰一人取り残さない教育』の実現に向けた授業づくり・学級づくり」を受け、本校の研究テーマを「自分事として捉え、みんなでつくりあげる学びの実践」とし、国語科を窓口とした研修を行った。

静岡大学の村山功教授を講師として招聘し、授業づくりや授業改善についての研修を行った。工作的発問やARCSモデルの視点、校内研修の推進の仕方について等、幅広い観点から御指導をいただいた。

ア ファシリテーターとしての教師の役割と学習形態

全ての児童が自ら学びを調整しながら資質・能力を身に付けていくような授業にするために、他者との対話場を教師が意図的に仕掛けた。その第一歩として、教師が説明や指示をする場を極力減らし、児童同士の対話を生み出す問い返しや、思考を揺さぶるような発問が、教師の発言の中心となるように心掛けた。児童同士の話し合いに耳を傾け、児童に委ねる場面と、教師が対話をつなげたり焦点化させるような発言をしたりする場面とを意識的に使い分けるようにした。【写真1】

児童同士の対話を深めるために、「順序付ける・比較する・分類する・関連付ける・理由付ける」のような発問や問い返しを意識した。教師は常に児童の対話が深まっているか見取り、適切なタイミングで言葉掛けするようにした。【資料2】さらに、対話による学びの深まりが生まれるためには、どのような学習形態や対話の人数、メンバー構成が適しているのかを考えた。学校全体で検討し、発達の段階に応じて、低学年ではペア、中学年・高学年では3人、4人と人数を変えることや、意図的に異なる考えをもつ者同士をグループにする

等、対話の人数やグループ構成の工夫の幅を広げることができた。

【資料3、4】



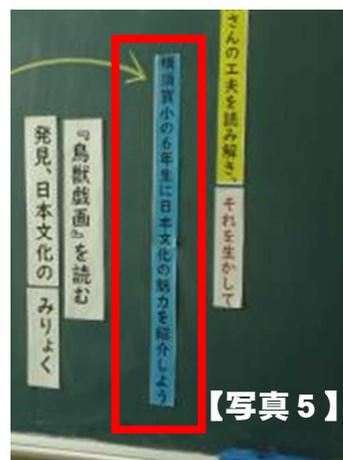
イ 単元構想・学習課題の工夫

学習指導要領の指導事項から、育成する資質・能力を的確に捉え、それをもとに単元の組み立てを行うことで、全ての児童が、単元を通して、確実に資質・能力を身に付けていけるようにした。そして、単元の最後で目指す具体的なゴールの姿を教師と児童が共有するようにした。6年生では、「『鳥獣戯画』を読む」のゴールを「横須賀小の6年生に日本文化の魅力を紹介しよう。」とした。【写真5】単元のゴールの姿を知った上で単元がスタートできたことで、児童は自分事として、本文から筆者の工夫を読み取ろうとした。その結果、比喻や読者に投げ掛けるような表現の工夫、論の進め方等の技法を本文から学び、自分の「日本文化の魅力」の紹介文に生かすことができた。【写真6】

また、ゴールを教師と児童が共通理解し、単元をデザインした上で、毎時間の授業では、児童の思考に沿い、児童にとって必然性がある「～たい」を引き出すような学習問題を設定した。学習問題は、教師が一方的に与えるのではなく、児童の思考に沿いながら、可能な限り児童と一緒に問題を作るようにした。4年生「ごんぎつね」では、単元を通してごんの気持ちの変化について考えていく中で、「兵十は、ごんの思いを知ることができただろうか。」という疑問が児童から生まれてきた。児童から生まれたこの疑問を学習問題として取り入れることで、児童が問題を自分事として捉えることができ、追究意欲が高まった。【写真7】

ウ 確かな学力につなげる「まとめ・振り返り」

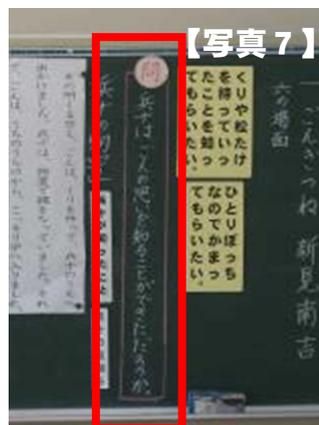
学習問題について考えを深めた児童が、最終的な自分の考えを書いたり、内容の理解度や活動の進捗の度合い等を自分自身で把握したりできるように、視点を与えた振り返りを行うようにし、学びが連続するようにした。【写真8】その際、学習問題の答えになり、本時の身に付けるべき内容の「まとめ」と、自己の学び方を振り返り、自分自身の学びをどのように次時以降につなげていくかを書き表す「振り返り」との使い分けを教師がはっきりと意識した。



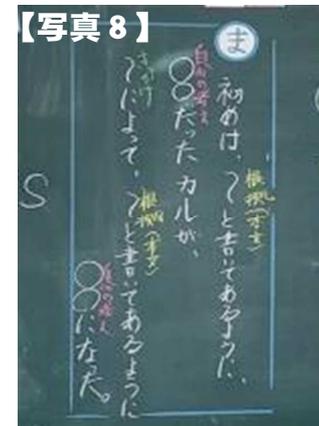
【写真5】



【写真6】



【写真7】



【写真8】

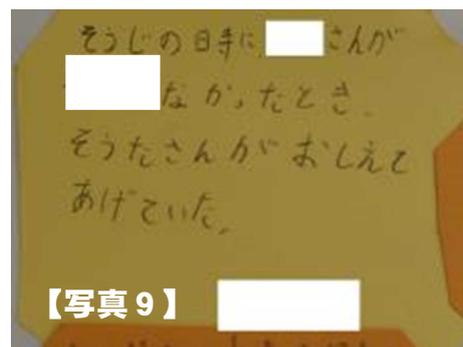
(2) 学級づくりからのアプローチ

生徒指導の柱「自己向上力を育てる生徒指導」のもと、「自己肯定感・自己有用感を高め、『かがやき』を合い言葉に自分で考えて行動する力の育成」を学級づくり・学校づくりのテーマとした。鳴門教育大学の久我直人教授を講師として招聘し、令和5、6年度の2年間、全学級の授業参観の後で講話をいただいた。その中で、子供のタイプや状況に応じた勇気付け・価値付けや「I」の伸長・「We」の拡張、学び合う集団づくりに至るまで、幅広い観点から御指導をいただいた。

ア 教師と児童・児童同士の望ましい関係を育む「かがやき」を見付け、広げる

児童の思いやりのある言動やよい行いを「かがやき」という言葉で価値付け、互に見付け合ったり、教師が称揚したりすることで、自己肯定感・自己有用感を高められるようにしたいと考えた。そこで、年度初めに「かがやき」の意義や大切さを児童と一緒に確認し、帰りの会で紹介する場を全学級で設けた。紹介された「かがやき」はカードにして掲示し、学級の「かがやき」が蓄積され、児童が

目に見える形で残すようにした。【写真9】また、朝、児童を迎える「おはよう黒板」【写真10】で、教師が児童のよさを紹介したり、昼の放送で教師が児童の「かがやき」を全校に伝えたりすることで、価値付けを行った。【写真11】



イ 児童が主体的に活動する学校行事

(ア) 委員会ごとのアイデア活動

委員会ごとに、生活をより豊かに楽しくする活動を創り出したり、学校生活上の問題点に気づき解決しようとしたりする、児童の生活に密着した問題解決的な活動を重視した。環境委員会では、「全校が楽しく、安全に遊べる環境を作りたい。」と全校で「だるまさんがころんだ」をして遊ぶ集会を考え、企画・運営をした。【写真12】「やってよかった」「ここを変えることができた」といった満足感、達成感を味わうことができるように、教師からの具体的評価を「かがやき」として児童に返すことを心掛



けた。このような取組により児童の自発的な活動が、学級活動や係活動等でも見られるようになった。3年生では、音楽で学習した歌や楽器の演奏を発表し合う「クリスマスコンサート」を企画した。学級内だけでなく、他学年にも呼び掛け、複数の学年が参加、参観するコンサートを運営した。【写真13】

(イ) たてわり・ペア活動

単学級ゆえに人間関係が固定化される傾向にあるため、たてわり活動・ペア活動【資料14】を取り入れ、学級とは違った人間関係の中で活動することや他者と関わるよさを感じ取ることに重点を置いた。4、5、6年生が順番に担当となり、計画から当日の遊び運営までを行った。ペア活動には、遊びや教科、総合的な学習の時間で学んだことを発表し合う活動も取り入れた。【資料15】

どの児童も学級とは違った立場で活動に参加し、自己肯定感・自己有用感を高め、異学年との関わりを通して、下学年を愛おしく感じたり、上級生を見て「あんな風になりたい」と憧れたりする姿が見られた。



2 2年間の成果のまとめ

(1) 授業づくりからのアプローチの成果

2年間の研究を通して、大須賀中学校区3校において、人権教育を基盤に、一人一人の児童生徒を大切にしたい教育活動を推進し、同じ視点に立った授業改善・授業づくりに取り組んだことで、義務教育9年間で育成すべき資質・能力を共有することができた。

ア ファシリテーターとしての教師の役割と学習形態

教師がファシリテーターとして、協働的な学びの場を意図的に単元や本時の中に組み込んでいった。また、じっと児童の対話に耳を傾け、対話の状況を見取って児童に委ねたり、思考を活性化するための発問を適切なタイミングで行ったりすることを積み重ねることで、一人一人が自らの考えを伝え、互いの考えの類似点や相違点を見つけ出し、自分たちの力で課題を解決しようとする意識が高まった。また、自分とは全く違う考えに触れることで、考えの幅が広がり、課題に対し、より多面的・多角的に考えられるようになった。

イ 単元構想・学習問題の工夫

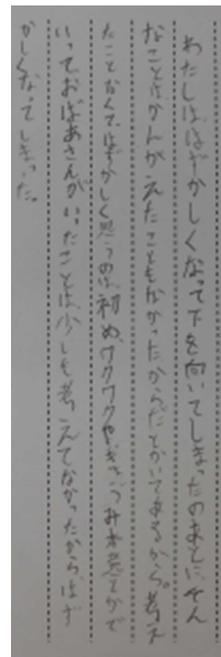
「単元構想」において、主体的・対話的で深い学びを通して資質・能力を育成するために、単元を貫く軸を設定し、各授業で問い続けてきたことは、児童生徒が学びの必要感や見通しをもち、自分事として学ぶ姿につながったと考え

る。このことは、全国学力・学習状況調査児童質問調査「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいましたか」が87.5%となり、静岡県や全国と比べ、5%以上高くなったことから言える。

また、「学習問題」を設定する際、工作的発問やARCSモデルの視点を参考にしながら、児童の思考に沿い、児童にとって必要感がある問題を設定することで、児童自らが学びを進めたり共に学んだりする姿が多く見られるようになった。

ウ 確かな学力につなげる「まとめ・振り返り」

最終的な自分の考えを文章にしてアウトプットすることで、授業で学んだこと、考えたことを振り返り、再構築・再認識するようになった。まとめ・振り返りの視点を提示することで、児童は何を学ぶのかがはっきりとし、意欲的に学習に向かうことができるようになった。児童のまとめからもそのことが見て取ることができる。【写真16】しかし、振り返りが必ずしも教師が期待する自己の学びを調整する姿に至らないこともあった。単元を通して自ら学び続けていく「学びに向かう力」等、これからの時代を生き抜くための資質・能力を再確認し、単元における効果的な振り返りの場面や視点の明確化、学びの蓄積の方法について、更に研究を進めていく必要がある。また、発達の段階を考えた振り返りの方法や内容の質を高めていくことも、自己実現に向けて、自ら学び続ける児童生徒の姿につながっていくと考える。



【写真16】

【大淵小 学校アンケートより】

NO	質問内容	R4児童	R5児童	R6児童	R6児童	R4保護者	R5保護者	R6保護者	R6保護者	R4職員	R5職員	R6職員	R6職員
		年間	年間	中間	年間	年間	年間	中間	年間	年間	年間	中間	年間
1	授業の内容がわかる	92	94	91	91	92	88	90	91	73	91	73	82
2	話をよく聴き、わかりやすく話している	86	88	87	91	88	84	82	83	55	64	55	64
3	好きな授業やがんばっている授業がある	96	97	98	98	99	98	98	98	100	100	100	100

【大淵小 全国学力・学習状況調査児童質問調査より】

質問No.	質問事項		1	2
(33)	学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか	本校	37.5	53.1
		静岡県	39.9	46.5
		全国	41.4	44.9
(48)	国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように工夫して文章を書いていますか	本校	40.6	40.6
		静岡県	33.4	48.5
		全国	37.1	46.1

学校アンケート結果から、「好きな授業やがんばっている授業がある」と答えた児童は令和6年度末で98%となった。本研究の指定以前の令和4年度と比べると微増であるが数値が上がった。また、「話をよく聴き、わかりやすく話している」の項目では令和4年度と比べると、児童の数値が5%上昇した。

全国学力・学習状況調査児童質問調査結果からは、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の質問に肯定の回答合計が90.6%で、静岡県の場合よりも4.2%、全国よりも4.3%高い数値であった。また、「国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように工夫して文章を書いていますか」の質問では強い肯定の回答が40.6%と、静岡県、全国と比べ高い数値を得られた。

これらの数値は、本研究指定を受けたことで、教師が児童主体の授業へと授業観を変えたことにより、児童が自分事として問題について考えたり、より主体的に対話を通して学びを深めたりしたことによるものと考えられる。

「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」で90.6%の数値が得られたのは、児童同士が主体的に対話し、単元で身に付ける資質・能力に近づけるように、教師がファシリテーター役に徹したことが大きな要因である。また、「好きな授業やがんばっている授業がある」の数値が上昇したことは、本指定研究の窓口とした国語科での授業をきっかけとして、その他の教科に対する学びにも変化をもたらしたと考えられる。

(2) 学級づくりからのアプローチの成果

発達の段階を意識したコミュニケーション活動や日常的なプラスの「ボイスシャワー」を行ったことで、自他を受容したり自己肯定感を高めたりすることができた。「教師から児童へ」だけでなく、「児童同士へ」も取組を広げたことで、温かな雰囲気の中で、安心して学び合えたり、自信をもって物事に進んで取り組んだりできる学級集団となってきた。その結果、質問調査「自分にはよいところがある」が87.9%から89.8%に向上した。

ア 教師と児童、児童同士の望ましい関係を育む

「かがやき」という言葉で児童のよい言動を認めることを2年間継続することで、教師が児童のよい現れに着目するということが意識付けられた。教師が着目できるようになると、自然と児童も他者のよさを見つけることが増え、互いに認め合う関係性が育ってきた。集団として温かな人間関係を築くことができたと同時に、個々の自己肯定感も向上させることができた。

イ 児童が主体的に活動する学校行事

ペア活動や学校行事等において、児童が思い描くよりよい学校生活の実現のために、話し合いの場を意図的に設定し、自分たちの手で、計画・立案・実践できるようにした。試行錯誤しながら、自分たちの思い描く最適解を創り

上げる体験は、児童が達成感や成就感を味わうこととなり、質問調査「学校が楽しい」が85.5%から91.8%へ向上したことに繋がった。「授業づくり」「学級づくり」を一体的に展開させ、研究を進めてきたことの成果であると言える。

【大淵小 学校アンケートより】

NO	質問内容	R4児童 年間	R5児童 年間	R6児童 中間	R6児童 年間
1	自分には、よいところがある。	82	85	88	89
2	友達の「かがやき」を見つけることができる。	85	88	92	89
3	縦割り活動は、楽しい。(割り遊びなど)	90	93	97	96
4	自分から考えて行動している。(R4 自分から一歩ふみ出している)	90	86	90	95
5	みんなで作くりあげようとしている。(R4 みんなでやりぬこうとしている)	93	96	91	97

【大淵小 全国学力・学習状況調査児童質問調査より】

質問No.	質問事項		1	2
(16)	学校に行くのは楽しいと思いますか	本校	62.5	31.3
		静岡県	48.2	38.3
		全国	47.2	37.6

学校アンケート結果から、たてわり活動等で児童自身が遊びや集会を計画・運営したことで、「自分から考えて行動している。」の数値が令和6年度末で95%、「みんなで作くりあげようとしている。」が97%に達した。また、「自分には、よいところがある。」と答えた児童は令和4年度から徐々に上がってきている。児童が主体となって行う行事や「かがやき」見つけの取組を行ってきたことで、自己肯定感が上がってきたのではないかと考える。

1 2年間の取組の状況

年間計画【別紙】に従い、若つつじ学園3校（大淵小・横須賀小・大須賀中）で「『誰一人取り残さない教育』の実現に向けた授業づくり、学級づくり」の研究に取り組んだ。

「人権教育」を基盤としながら、校内研修による「授業づくり」と生徒指導による「学級づくり」を一体的に推進した。生徒同士や生徒と教師の望ましい信頼関係を構築し、全校生徒が安心して登校できる『誰一人取り残さない教育』の実現に取り組んだ。

校内研修を軸とした授業づくりでは、静岡大学の村山功教授を招聘し、講演を聴講したり、工作的発問や授業展開の工夫について研修を深めたりして授業づくりを研究し、生徒が主体的に学ぶ授業を展開することで「確かな学力」が育まれると考え実践した。また、生徒指導を軸とした学級づくりでは、鳴門教育大学の久我直人教授を招聘し、講演を聴講したりC活（コミュニケーション活動）に取り組んだりし、全校生徒が笑顔で登校する学級づくりに取り組んだ。

令和6年度は、指定研究によるこれらの取組が2年目となり、授業づくりにおいては、校内研修で単元構想、学習課題、誰一人取り残さないための手立て、授業展開、振り返りの5点に力を入れ、教師の授業力向上に取り組んだ。学級づくりにおいては、生徒の自己肯定感や自己有用感、自己有能感の向上を目指し、教師と生徒・生徒同士の望ましい関係づくり、安心して伝え合える学級づくり、生徒が主体的に活動する学校行事の3点に力を入れ、生徒にとって安心・安全な居心地のよい学級づくりに取り組んだ。

(1) 授業づくり

3校で協働しながら授業研究を推進するため、公開授業が行われる際には、互いに参観し合い、授業づくりに向けて同一歩調で研修を進めた。

6月5日(水) 横須賀小学校公開授業に2名参加(教頭、研修主任)

6月12日(水) 第1回合同研修会に3校全職員参加全職員参加

7月3日(水) 横須賀小学校公開授業に1名参加(数学科教諭)

7月10日(水) 大淵小学校公開授業に3名参加(教務主任、国語科教諭)

8月29日(木) 大須賀中学校公開授業に横須賀小3名参加(生徒指導主任、道徳主任、教頭)、大淵小2名参加(校長、教頭)

5月29日(水) 静西教育事務所支援訪問 3年C組『英語』

年間の校内研修の柱をどのようにおさえて取り組んでいくか、以下のような内容にしたがって協議した。

若手職員のために希望参加で行われた学習会であったが、全職員が参加し、道徳の授業展開の仕方や、道徳の授業を見る視点などを全職員で共有できた成果のある学習会となった。

<道徳学習会の柱>

- ・道徳科の目標とは。
- ・発問で何を問うか。
- ・道徳科授業の基本型「導入、展開（前段と後段）、終末」について。



【写真 1】



【写真 2】

8月29日(木) 静西教育事務所支援訪問 2年A組『道徳』

事前研修での協議内容は以下のとおりである。

- ・ねらい、中心発問、評価のつながりについて。
- ・後段の発問は、自分事になる問いか。
- ・価値観や考えを広めたり深めたりできていたか。
- ・自分事の振り返りにするために、どのようなことが必要か。

事後研修をトリオで行い、よかった点や改善点を協議した。導入のために準備した主人公の動画を、はじめに映像なしの音だけで聞かせ、次に映像ありの動画を視聴させる仕掛けが効果的であった。また、リコーダーを左手だけで演奏することも資料に興味をもたせる上で大きな効果が見られた等の意見が出された。

この中心授業においては、授業を展開していく中で、生徒が積極的に考えたり活動したりする場面が多く見られたこともあり、時間配分が遅れていったことで振り返りの時間を確保できなかったことが一番の課題となった。

8月9日(金)、8月29日(木)、9月13日(金)、10月4日(金)
10月28日(月)、11月8日(金)、11月19日(火)

「研究発表プレゼンテーション作成の会」と「発表準備の会」

上記の日程で、主に若つつじ学園3校合同で研究概要や当日の発表プレゼンテーションの作成を行った。

3校の研修主任が何度も顔を合わせ、各校において全職員で共通理解を図りながら取り組んだ。小学校の取組を効率的に中学校に生かすには、どうすればよいのかなど、多方面にわたり意見交換をする機会になった。

小学校と中学校が、同じ指定研究の目標に向かいながら、お互いにどのようなことに重点を置いて取り組んでいるのかを理解し合って、研究に取り組むことができた。

(2) 学級づくり

学級づくりにおいても、3校が連携して進められるよう、令和5年度から講師として鳴門教育大学の久我直人教授を招聘し、学級づくりや人間関係づくりについての研修を行った。大須賀中学校区の子供たちは、思いやりがあり協調性が高い反面、自分の考えや意見を自信をもって言えないという課題が見えた。このようなよさと課題を踏まえ、全校生徒が笑顔で登校することができる学級づくりに3校で取り組んだ。

6月24日(月) 静岡県サポートチーム派遣研修『学級づくり』

学級づくりにおいては、鳴門教育大学の久我直人教授を招聘して2年目となる学級づくり研修を行った。久我教授からは、教師と生徒の関係や距離感が望ましく、学級づくりが進んでいると評価をされた。しかし、自信をもって発言できない実態もあることについて指導があった。学校が「頑張り」と「優しさ」を引き出し、生徒たちの「I (アイ) : 学びに向かう力」と「We (ウィー) : 人や社会とつながる力」を育むための講話を聞き、生徒のI (アイ) を伸ばし、We (ウィー) の世界を広げることについて考える研修となった。

9月27日(金) 静岡県サポートチーム派遣研修

鳴門教育大学の久我直人教授を招聘して、学級づくりについての研修を行った。令和6年度になって2回目となるこの研修会では、主に久我教授から昨年度と比べて研修は進んでいるということ、今年度の1回目と比べて学級づくりは進んでいるということの評価をいただいた。そして、学級づくりが進んでいると評価をいただいた上で、今後取り組むべき内容として、「生徒が積極的に意見を言えるためには、自分の意見や考えに根拠をもてる必要がある。」と御指導いただいた。この後、この点について校内研修を行った。

＜事前研修での協議内容＞

- ・ 学び合う学級集団となっていたか。
- ・ 自分の意見や考えの理由や根拠をもとにして、学級やグループで発言する姿があったか。
- ・ 学び合う集団となるために、今後の指導において大切にすべきことは何か。

上記の内容で事前に研修を行い、久我教授の講話を聴講した後、トリオ研修【写真3】によって「理由や根拠をもとに自信をもって自分の意見や考えを言うことができる生徒の育成に向けて」の研修テーマで多くの意見を出し合うことにより研修を深めた。



【写真3】

＜本校での具体的な取組＞

- ・ ポジティブフォーカスの推進

教職員が、プラスのボイスシャワーを心がけ、「自分にはよいところがある」と自覚し、自信をもって自分を表現できるよう、一人一人の自己肯定感の向上を目指した。

- ・登校状況の確認

欠席者に対して、確実に連絡をとるとともに、3日欠席が続く場合は、家庭訪問を確実に行き、早期の生徒指導対応を行った。

- ・居心地のよい生徒の居場所づくり

生徒にとって居心地のよい居場所となる学級づくりの推進。

- ・大須賀中向上委員会

生徒会本部役員や学級委員の生徒たちで、校則や生活のルールの見直し、生徒主体の活動の企画運営を行った。

また、生徒主体の活動として生徒会本部や委員会、学年学級の企画立案による様々な活動を行った。

プラスのボイスシャワーにおいては、教師と生徒・生徒同士の望ましい関係を育み、教師から生徒へ、そして、生徒同士へと広げていくようにした。全ての教育活動において、一人一人のよさを認め、具体的によさを伝えるようにした。また、保護者や地域の大人からも、生徒一人一人のよさや頑張りを認めてもらう機会を増やすため、「eじゃん掛川」（掛川市学校 Web サイト）【資料 2】を活用し、生徒の学ぶ姿や様々な活動で活躍する姿を発信するようにし、この情報発信が、家庭での話題となり、一家団欒のきっかけとなるよう取り組んだ。



【資料 2】

不登校対応においては、まず第一に生徒の家庭環境を把握し生徒理解に努めた。その上で、生活指導担当者会で情報共有して組織的に対応し、新たな不登校生徒を出さないようにした。

学級づくりの面では、安心して伝え合える居心地のよい居場所づくりを目指した。C活（コミュニケーション活動）での「話を聞く」スキルトレーニングや、「おおすか型学び合い」としてのコの字型学習隊形【資料 3】も行った。



【資料 3】

大須賀中向上委員会の取組により、生徒が生活しやすく、自己判断できる生徒の育成を目指した。セーターやカーディガンの使用を含めた制服の着こなし、頭髪のルール、靴下や下着の色について、iPadのスクリーンタイムの解除について等、生徒の日常生活に関する校則について協議し改正してきた。生徒たちは、大須賀中向上委員会の取組を通して、自分たちの判断には、責任を伴うことを学んだ。

生徒が自分たちの力で成し遂げ、成功する体験を積むために、生徒が主体的に活動する学校行事を行った。【資料4】学習委員会による「ビブリオバトル」、生活委員会による「A-1グランプリ」（あいさつ運動）、1年生の「タイピング対決」、生徒会本部の発案による「能登半島地震復興支援募金」等の活動が、生徒の企画運営によって行われ、学校生活に楽しみや潤いがプラスされた。



【資料4】

2 2年間の成果のまとめ

人権教育を基盤に「『誰一人取り残さない教育』」の実現に向けた授業づくりと学級づくり」に取り組むため、まずは教職員の人権感覚の実態を知ることと、人権感覚の向上を図ることとした。27項目のアンケートで○を3点、△を2点、×を1点で換算し、得点を100点満点で表したアンケート集計結果では、平均点が令和5年5月と比べ、令和6年7月では、29.9点向上する結果が得られた。

【人権感覚アンケート集計結果】

令和5年5月	60.5点
令和6年7月	90.4点

(1) 授業づくりの成果

大須賀中学校区3校において、人権教育を基盤に、一人一人の児童生徒を大切にされた教育活動を推進し、同じ視点に立った授業改善・授業づくりに取り組んだことで、義務教育9年間で育成すべき資質・能力を共有することができた。

県指定で2年間取り組んだ研究の成果として、重点的に取り組んだ「単元構想」、「学習課題の工夫」、「授業展開の工夫」、「誰一人取り残さないための手立て」、「振り返り」の5つの点について、職員全体で研修を深め実践を積むことができた。

生徒アンケートの「授業の内容が理解できた。」では、91.7%の数値を得ることができた。研修の成果として、生徒の学ぶ意欲を高め学ぶ意識を育み、学ぶことが楽しいと答える生徒を育成することができた。授業の様子から、生徒が生き生きと学ぶ姿を育むことができたと感じる。また、「振り返り」についても、本時の学びを確認し次時の学びにつなげることができた。

(2) 授業づくりの課題

生徒の学ぶ姿を育むという点では成果が見られたが、自己の学びを調整する姿にまでは至らず、現段階では本校生徒は学びの主体者になれていないと感じる。今後は、これまでの研修と実践に加え、生徒たちが自己実現に向けて、自ら学び続ける姿につながっていく取組を行っていく。

(3) 学級づくりの成果

令和5年度から取り組んだC活（コミュニケーション活動）や日常的なプラスの「ボイスシャワー」を行ったことで、自他を受容したり自己肯定感を高めたりすることができた。「教師から生徒へ」だけでなく、「生徒同士へ」にも広げられ

たことで、温かな雰囲気の中で、安心して学び合えたり、自信をもって物事に進んで取り組んだりできる学級集団となってきた。

また、学級活動、生徒会活動、学校行事等において、生徒が思い描くよりよい学校生活を実現するための話合いの場を意図的に設定し、自分たちの手で、計画・立案・実践できるようにしたことで、生徒が達成感や成就感を味わうこととなり、生徒アンケートにおいて「学校の生活は楽しい」97%や「自分にはよいところがある」85%の高い数値を得ることができた。

人権教育を基盤として様々な教育活動を行い、学級づくりに取り組んだ成果として、不登校生徒の割合が、令和6年12月では全校生徒263名のうち不登校生徒数2名となり、0.8%にすることができた。生徒アンケートでは、97.0%の生徒が、「学校の生活は楽しい」と回答している。

【生徒アンケート結果】※肯定的な回答をした割合

質問内容	R5.7月	R6.12月
学校の生活は楽しい。	97%	97%
大須賀中は安心・安全な学校だと思う。	96%	97%
部活動や行事に積極的に取り組んでいる。	96%	98%
大須賀中の先生はよいところを認めてくれる。	95%	97%

(4) 学級づくりの課題

人権教育を基盤にして学級づくりに取り組んだ成果として、不登校生徒数を減少させることができたが、学校に来ることができていない生徒への有効な手段は何か、何をきっかけに生徒を登校に向けて動かすことができるのかを考えなければならない。学級集団と交流ができるように、また、次のタイミングで登校できるように、何を仕掛けるかが課題と考える。

学校に来ることができている生徒の中にも、「学校の生活は楽しい。」の質問に対し、3%の生徒が肯定的な回答ができていないため、97%の生徒たちに巻き込み、学校が楽しいと言える手立てを考えていく。

これからも引き続き、全生徒が笑顔で登校し、学校が楽しいと答え、安心して安全な学校となるよう取り組んでいく。

3 その他

3校合同で研究を進めることにより、「できた、分かった」や「学ぶ意欲向上」のための授業研究への取組や、発達段階に応じた望ましいコミュニケーション活動能力の習得、異学年交流による自己有用感や自己有能感の達成など、9年間の義務教育全体を見通した成果や課題を見出すことができた。

そして今回、指定を受けて取り組んだ「授業づくりと学級づくり」において、中学校から見た小学校段階で定着させてほしい学習内容やコミュニケーション活動能力についても話合いができ、「小学校の児童」と「中学校の生徒」の育成について、教職員が同じ目標に向かい、発達段階に応じた適切な指導について何度も協議する機会をつくることができた。小学校と中学校が「この地域の子供たちをよりよく育てるために」という共通の目標に向かって取り組む研究ができたことが大きな成果と考えている。

【別紙】

令和6年度 大須賀中学校 研修計画+授業案作成計画

研修計画

日程	内容
4月8日	校内研① 令和6年度の研修について、おおすか型学び合い、UDについて
17日	校内研② 単元構想+振り返り
22日	校内研③ 授業案について、支援訪問授業案検討（英語）
5月29日	静西教育事務所支援訪問（校内研④を兼ねる） 中心授業：英語（鈴木健）（全員授業公開、A4略案）
6月12日	学園合同研修会（会場：大須賀中）（校内研⑤、公開あり、授業案なし、授業名のみ）
6月24日	校内研⑥ 久我教授来校（公開あり、授業名+学習課題のみ）
7月19日	校内研⑦ 人権教育
22日	校内研⑧ 生徒指導研修（SC）+人間関係プログラム 11/22授業案一次提出
29日	校内研⑨ 支援訪問授業案検討（道徳） 一次提出授業案修正完了
8月1日	11/22授業案清書提出
8月9日	研究発表準備会（研究概要作成）
8月29日	静西教育事務所支援訪問（校内研⑩を兼ねる） 中心授業：道徳（玉村）（⑤校時公開、当日A4略案）
9月13日	3校合同プレ発表
9月18日	校内研⑪ 学園研究発表会 授業案検討
27日	校内研⑫ 久我教授来校（公開あり、授業名+学習課題のみ）
10月4日	研究発表会準備（プレゼン作成）
10月17日	第2回推進委員会
10月22日	研究概要提出（市教委）
10月28日	研究発表会準備（プレゼン作成）
11月1日	研究発表会準備
11月6日	校内研⑬ 学園研究発表会に向けて
11月8日	研究発表会準備（プレ発表）
11月19日	研究発表会準備（プレゼン最終確認）
11月22日	学園研究発表会（会場：大須賀）単元構想+A4略案
2月17日	校内研⑭ 研修の振り返り

(4) 掛川市教育委員会

1 指定校への支援内容

(1) 研究及び校内研修の進捗状況の把握、指導・助言

学力推進協議会からのサポートチーム派遣や静西教育事務所による支援研修、研究指定校が招聘する講師派遣に同行した。研究の進捗状況等を把握し、研究及び校内研修について支援・助言を行った。

(2) GIGA 授業づくり支援訪問

子供たちに身に付けさせたい資質・能力の育成のために、どのように一人一台端末を活用するか視点で、授業づくりの指導・助言にあたった。参観授業で見られた共同編集、相互参照、相互評価等の活用場面を取り上げ、子供の学びの姿をもとに授業者や研修主任、管理職へ授業づくりについて助言した。

- ・ 7月 19日 大淵小学校
- ・ 9月 11日 横須賀小学校
- ・ 11月 15日 大須賀中学校

(3) 研究発表会の授業案、研究の概要作成への参加

夏季校内研修において、単元構想の検討から関わった。研究発表会公開授業の単元や授業過程についての検討を通して、子供に身に付けさせたい資質・能力育成のための授業づくりについて指導・助言した。掛川市が目指す「3つの創る力」発揮・育成の視点から、新たな価値を創出する「創像力」、多様な他者と試行錯誤しながら協働する「創合力」、自ら課題を見つけ、学び、行動し続ける「創律力」を、教師が授業を通して育成し、子供が発揮する場면을計画的・意図的に設けていくよう伝えた。

また、研究の概要作成時には、研究の視点や方法、成果・課題を整理し、研究内容を分かりやすくまとめていくための助言をした。授業案検討や研究の概要作成において、静西教育事務所から大変多く御指導いただき、学校職員だけでなく市教育委員会指導主事も研修する機会となった。

(4) 掛川市「未来を切り拓く3つの創る力」育成プロジェクト

掛川市学力向上・授業改善プロジェクトメンバーを、本年度は各学園1名の研修主任とした。若つつじ学園では、大須賀中学校研修主任がプロジェクトメンバーとなり、年間6回の会議に参加した。会議では、他学園の研修主任と学園・学校の授業づくりについて話し合い、若つつじ学園他2校には、研修主任を通して周知を図った。

2 研究成果等の周知について

本年度第1回市内研修主任研修会において、横須賀小学校の研修主任が、若つつじ学園研究の進捗状況を発表した。

また、研究発表会開催について市内小・中学校や中堅教諭資質向上研修関係職員に周知し、当日大変多くの参加者があった。研究の概要等が分かるものは、WEB上で公開した。

学力向上推進事業
学 力 向 上 推 進 協 議 会 報 告 書
～誰一人取り残さない教育の実現に向けて～

令和7年3月
静岡県学力向上推進協議会